

アROUND半世紀前の川高 実録・部室ものがたり

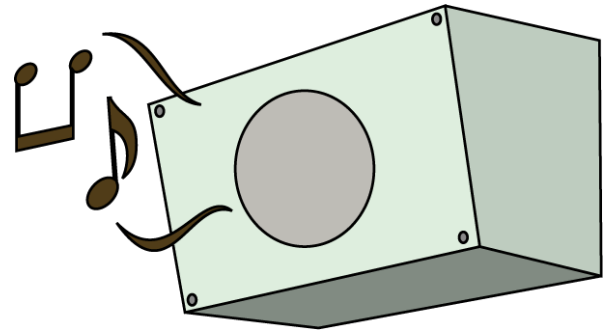
16期 古賀 滋

1 「これが青春だ」

私は小学校 6 年生の秋、中学へ行ったらクラブ選択をしなければならないと聞き、放課後暗い夜道をとぼとぼ帰る運動部、しかも中学グラウンドから聞こえる罵声を聞いて、あ～やだやだ、運動部には入るまいと心に誓った。天文部に入ったものの、入学早々、天体望遠鏡ドームが故障、補修予算がなく無期限休部となり、「帰宅部」で中学 3 年間で過ごした。

そして川高に入った時に引き続き「運動部には入らない」決意だった。コンクールや大会で競争させられるのも嫌なので、ピッタリだと思って放送部に入った。部室は電子機器が並びサンダーバードの基地みたいなもので快適だった。閉鎖空間だが頭上を着陸機が通る伊丹空港の騒音対策で冷暖房完備・二重サッシ。何より、好きな音楽を昼休みなどに流せると

あって活動も気に入った。ちょうど男女 5 人ずつの部員なので、ペアになって昼休みの音楽を担当することにした。ポップス、邦楽、フォーク・ロック（おとなしめのもの）、ジャズ・・・私は趣味だったクラシックを迷わず選んだ。毎週 1 回は好きなレコードを持参するか、部室のコレクションから選んで流す。まず、防音室内の



女子に開始合図のキューを指で送って「みなさん、こんにちは。今日は※※作曲の##です。演奏は・・・」と紹介アナウンスをしてもらい、巨大な操作盤で音量を上げながらレコードかテープレコーダーをスタートさせる。簡単と言えば簡単だが音量の大小、雑音などに気を遣う。しかし、昼休みの数十分を支配しているような快感があった。体育祭や生徒集会時のマイク配置や長いコード敷設も任務のうちだった。のちに生徒集会でマイクの奪い合いになった時も（反体制だから、奪うほう）大事なマイクや線が壊れないようにだけは気を遣った（笑） また、部室日記を必ず毎日つけた。交換日記みたいで文章力も養えた（と思う）。

放送部室はほとんど教師も部外者も来ないので治外法権に近い。もっとも上級生が来る時は座って話した記憶がない。起立！である。結構序列を重んじていた。20 歳代そこそこの人気アナウンサー「桜井一枝」大先輩が来られた時は天に上る気持ちだったし、ペギー葉山の「学生時代」みたいにチャペルが似合いそうな美しい先輩が数人いて、来られるとドキドキして仕方がなかった。男の先輩も一様に優しい人ばかりだったが、放送部と器械体操を掛け持ちしている先輩がいるので、体育館へ部員と一緒に見に行くと、平均台で開脚中・・・その短いブルマー姿は 50 年たった今でも鮮明な記憶だ。（こら！）とにかく、お話が大事なクラブ、しかも男女半々なので、女子との会話のコツをつかむのに持って来いだった。縁遠いタイプなのに、在学中に 3 人もつまり毎年「女子フレンド」に恵まれたのは放送部のお

かげに他ならない。

2「城」

2年生の終わり近くになると上級生は受験のためにあまり来ないから放課後はほとんど無人に近い。社研にもダブル所属していた私は週番の放課後、有効に活用させてもらった。その一つがヘルメットにきれいな青色ペンキを塗るなど活動用具制作作業だった。手塗りで乾くと筆のスジスジが微妙に浮き上がり、我ながら美しいなあと感心しながら（今から思えばウマシカそのもの？）反帝とかプロレタリアとか文字を書き、素晴らしいオリジナルヘルメットの出来上がり。と、そこへ部室の補修をする労働者が話しかけて来た。無茶したらあかんで、と説教だ。こちらも負けてはいない。「いや、ベトナム戦争を終わらせる平和運動は必要と思います」と反撃。すると「デモで道路が渋滞して仕事に遅れそうやったがな。世間に迷惑かけるなよ。」としつこい。「そんな個人事情と、頭の上に爆弾降らせられるベトナム戦争反対とどっちが大事ですか」と再反撃。30分以上言い合いして水掛け論で終わったが論点が整理されて、普通の労働者の意見も聞いて良かった。部室でそんな作業してるのを先生に言いつけられたらまずいなと後悔したが、それは無かったようだ。



さらに当時流行り出していた喫煙・飲酒も一度やってみなければとということで買い込んできて、部室でそっとやってみた。ところがハイライトを3本吸ったところで咳が止まらず、苦さが口中に充満し、これは自分に向かない！と悟り、以来吸う事は無かった。大学での交際相手に「吸ったら格好いいかも、やってみて」と言われた時には吸う真似だけした。あまり取り柄がないのに奥様に結婚してもらえたのは無喫煙のおかげだろう。お酒もジン・ウォッカ・テキーラのミニボトルを買って試飲したが、全部おいしくなかった。強いお酒は飲まず、一次会はビール、二次会はブランデーの超薄い水割りを厳守して悪酔いや肝臓病から身を守る癖がついたのも川高放送部室のおかげで、深く感謝したい。（そんな事に使うな?!）また放送部は発声練習が熱心だ。静かな場所に並んで「アエイウエオアオ」や早口言葉、息を思い切り吸って吐く息と声を小さく長く、ストップウォッチで何分持続できるか訓練する。先輩たちは確かに「あまり大きくない声ながら明瞭な発音」の人ばかりで大いに見習った。これは後年役に立った。いわゆるアジ演説で叫んでしまうとすぐに声が枯れるし、うるさい声はよけい聞き苦しいのだ。

なお、卒業後の先輩・同級生の行き先は進学先こそ地味だが就職先は大企業・有名企業・公務員・教職など、なかなかのものだ。

3「我らは硬派」

3年になると、放送部業務は2年が主体になるので、社研の部室に重点が移った。こちらは相当なものだ。中庭にあるプレハブの一室がわが社研。全体に落書きはあるし、よその部屋から時々ジャラジャ

うと言う音が聞こえた。麻雀らしい。煙がこっそり上がってるクラブも、ヌードポスターを貼っている部室もある。しかしうちは反体制だから硬派で行こうと言う事で麻雀もエロも喫煙もご法度にした。その代わりに、ハンドマイクとゲバ棒を常備してあって、時々出撃し「我々は〜！」と演説する。授業中でも関係ない。(今から思えば迷惑な事だ。反省。)校舎を壊すことは無かったのがせめてもの救いか？ 放課後の居場所が常時あるのは「素敵」だったからそれを追い出されるような事はできない。



ある日大変な事が起こった。我々の活動をよく批判する生活指導渡谷先生が暴言・虚言で活動の抑圧をしたと上級生が言ってきた。総出で部室を飛び出し、生徒たちをハンドマイクで呼び集めて追及集会になった。100人近くいると数で教師に勝てる。夕方近くに始めたが、押し問答で夜になった。心配した親が多数学校に来て、少しずつ生徒が連れ帰られて減ったが結局夜12時近くまでワアワアやった。(今から思えば迷惑な事だ。反省) 我が家は慣れっこなのか、学校に来ない。木川にある我が家まで暗い夜道を30分とぼとぼ帰ると、ずーっとパトカーが伴走する。途中でずっと寄って来て「はよ帰りや」・・・助手席には制服ではなく私服の刑事。どこかアジトにでも行くのかと監視されていたのだろうか、いや純粹に帰り道を心配してくれたのかも(そこまで親切ではない)。これも後で聞いたのだが、学校の要請が出たら突入できるように警官隊が新大阪駅と学校の間で待機していたそうだ。

それにしても「夜中まではいや」と思って「運動部」は敬遠したのに、夕方どころか帰宅が夜中になるような別くちの「罵声も飛び交う激しい運動部」に入ってしまうとは！

4 「スエヒロのステーキ弁当」

2年生後半から3年生にかけては一気にブレークの時期となった。毎日のようにデモや集会がある。世のため人のためと信じて疑わないのだからデートがない時はほぼ皆勤でどこへでも行った。北淀や春日丘などの同志校へ応援にも行き、関学で争い事の応援にも行って大学生に交じってかなり激しい事もした。夏休みに東大・明

日間の旅もあったが、家城公園武力衝突事件で事さんがサイレンを鳴り来て、3泊4日、天満



治大・京大に連続宿泊7に帰ると4カ月前の大阪逮捕状が出ていて私服刑らさないパトカーで迎え無料宿泊所に泊めてくれ、

ヘルシーな麦ご飯を無料でふるまってくれた。2日目に父親がたぶん3千円はするであろう「スエヒロの特上ステーキ弁当」を差し入れに来た。おいしいには違いないが、そんな高級なものを食べるのは初めてで、しかも取調室で刑事2人に「優しく」囲まれながらだから、味は全く覚えていない。覚えているのは「えーお父さんやないか、泣かさんようにな」の言葉だけだ。高校生の付和雷同組と思われたのか不起訴で済んだ。貴重な経験や、と自画自賛したが、妹は家宅捜索で自分の部屋も見られてたいそう

怒っていた（すみません）。

こういう傷心の時に社研の部屋へ久しぶりに行くと故郷みたいでやっぱり良かった。

部室を壊したり、先生にけがをさせなかったのは今にして思えばせめての救いだ。

今でこそ考えも体形も顔も丸いが、とんがっていた頃の不行績で、両親には親不孝の極だったろうが何とか結婚もできて、2人の孫を見てから亡くなったので良かったと思っている。なお、私は卒業式を欠席した。門を入れて講堂に向かおうとすると、騒然とした雰囲気。社研などの下級生たちが応援の卒業生や他校生も入れて数十人で門前デモをして機動隊に抑え込まれていた。そこでマイクを受け取り、弾圧やめなさい！やめないなら卒業式ボイコットします、と演説して下級生に応援を送った。そうしているうちに式も終わったので、証書だけを先生から受け取った。記憶に間違いがなければ、しもぶくれが百人一首の姫みたいで可愛かった高柳洋子先生。騒動は知っているはずだが、何も言われず同級生もみんなニコニコだった。

5 「失敗は人生の華」

こうして二つの部室で笑い、泣き、大義を語り、反対側の意見も聞き、良いこと楽しい事も悪い事つらい事も経験したのが人生の肥やしになった気がする。大きな迷惑をこうむった先生達や同級生にはすまないと思うし、早世された渡谷先生（憲法と教育基本法に基づき君たちを教育する、が口癖）には責任すら感じる。ピラに名前を大書され、夜中まで缶詰にされて立腹のお酒が進んだかもしれないし。40年以上あとで、府教委中枢にいた人から「厳しく当たっていたように見えた先生たちは実は反戦・反差別・民主を志向する我々の意思を体現して、君たちの味方やったんやで。」と聞かされて二度ビックリだった。

江風会総会で母校を訪れ、校舎を見るとアラウンド半世紀前が走馬灯のように浮かぶ。川高に限らないだろうが、一番多感な高校生時代は思い切り色々な事をやって見るべきだと思う。地下鉄ホーム広告に「失敗するなら早めに！」とあった。その通りではないか。

後輩の皆さん、クラブはよく選んだ後、ぜひ目いっぱい活動するようお勧めする。ただ迷惑はなるべくかけないように（←私が言うのも何だが）。

もしまだ帰宅部なら、学校に相談して途中からでもどこかに入りませんか？

金持ちも貧乏人も、人生・青春は平等に1回だけ。「帰宅部」ではその後の人生に「もったいない」よ。社研は残念ながらもうないけど、「外国ルーツ生徒との交流」「多文化共生」に取り組むなど、とても有意義と思うけど。